

### 【評価項目 6-1-8】 生涯学習への対応

(必須要素) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性、妥当性

#### (現状の説明)

退学者の再入学、既卒者の科目等履修生、一般の聴講生となることに関しては柔軟に対応している（「7.1.3 学生の受け入れ」の「評価項目 5-0-12」および「評価項目 5-0-9」参照）他、生涯学習のカリキュラムとしては、全学的なリベラルアーツ・プログラム（KGLP）に理工学部から2科目（自然科学史、ベンチャー企業と独創性）を提供している。また、大学による一般向けの無料公開講座「オープンセミナー」での講義担当（2002年度・2004年度）をしている。

#### (点検・評価の結果および改善の具体的方策)

聴講等の希望はほぼすべて受け入れており、生涯学習の需要に対する受け入れ態勢は整備されている。

### 7.1.4.2 教育・研究指導のあり方

#### <2003年度に設定した目標>

1. 入学時に行っているオリエンテーションを更に充実させ、入学者の多様性の度合いをいち早くつかむ。必要に応じて導入教育を実施する。
2. 担任制を活用し、個々の学生に対してきめ細かな履修指導を行う。
3. 学生の学修状況等を勘案して、履修単位数制限を随時見直す。また、第4学年以上について履修単位数制限が無い点を早急に改める。
4. 厳格な成績評価の実施を行うために、成績評価の仕組みの整備に努める。
5. 授業時間数が確保されているかをチェックする仕組みを作る。

### 【評価項目6-2-1】 カリキュラムにおける高・大接続

(必須要素) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

#### (現状の説明)

カリキュラムとして特別な導入教育は実施していないが、高等教育へ円滑に移行するためいくつかの措置を講じている。早い時期に合格が決定する各種入試の合格者に対しては、レポート課題などを課して入学前教育を行っている。入学時には新入生全員に対してオリエンテーションを実施している。またその際に担任教員との懇談も行い、各学科のカリキュラムに円滑に適應できるよう指導している。さらに、入学後早い時期に学科単位でのオリエンテーション合宿も実施している。補習授業実施のための基礎資料を得る目的で、毎年カリキュラムについてのアンケートを実施して、高等学校における科目履修状況と学部初年度の成績との相関について検討しているが、2004年度までの時点ではっきりした相関は得られていない。

#### (点検・評価の結果)

これまでの調査では、大学初年度の物理系科目の成績と化学系科目の成績は、高校で物理または化学を受験勉強したかどうか依存していないという結果が得られている。大学入学後の成績は、高校時代の科目履修や受験勉強の有無よりも、基礎的理解力の高さや勉学への意欲の方が重要な因子となっていると思われる。現状では、火急に今以上の導入教育を実施する必要はないと判断しているが、2006年度より入学してくる高校で新課程のカリキュラムを履修した学生についての情報分析をしていく必要がある。

#### (改善の具体的方策)

今後も入学者の多様性の度合いをいち早くつかむ努力を続け、更なる導入教育実施の必要性の有無の検討を継続して行っていく。

#### 【評価項目 6-2-2】 履修指導

- (必須要素) 学生に対する履修指導の適切性
- (必須要素) オフィスアワーの制度化の状況
- (必須要素) 留年者に対する教育上の配慮措置の適切性
- (選択要素) 学習支援 (アカデミック・ガイダンス) を恒常的に行うアドバイザー制度の導入状況
- (選択要素) 科目等履修生、聴講生等に対する教育指導上の配慮の適切性

#### (現状の説明)

新入生に対しては、入学時に全員を対象とした履修指導を行うと共に、学科ごとの履修指導を行っている。新2年生以上に対しては3月の成績発表の日に学科毎に履修指導を行っている。これに加え、成績表は担任教員から直接渡すことを原則としており、その際各学生に個別に履修指導が行われている。成績表は保証人にも送付しており、父兄との連携にも努めている。また、卒業研究に配属された学生は、研究指導教員1人あたり平均6.8人(2004年度)であり、学生ひとり一人にきめ細かい履修指導が行われている。オフィスアワーが久しく前に制度化されている上に、理工学部では多くの教員が常時在室しており、学生が担任教員等との面談に不便を感じる状況もほとんど生じていない。留年者に対しても担任教員が面談の上、その学力に応じた履修指導を行っている。また、留年したことによりその後の履修が著しく困難になることのないように、指定クラスの変更を認めるなど配慮している。特に2002年度以降、新旧のカリキュラムが並行して施行されているため、科目の再履修者に混乱が生じないよう「授業科目履修心得」を別々に作成し、読み替え措置を周知徹底するよう努めている。

#### (点検・評価の結果)

各学科単位での履修指導に加えて、担任制を活用したきめ細かな履修指導がなされており、目標はおおむね達成できているが、成績表を担任のところに取りに来ない学生に対するケアについては改善の余地がある。

#### (改善の具体的方策)

学生が登校しやすい日に成績発表日を設定するなど、担任制度を円滑に運用できるように

工夫し、学生により親切的な指導を行っていく。

### 7.1.4.3 教育方法のあり方

#### 【評価項目 6-3-1】 授業形態と授業方法の関係

(必須要素) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

(必須要素) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

(必須要素) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

#### <2003年度に設定した目標>

1. 科目の性質に応じた適切で特色ある授業形態、授業方法を組織的検討する。
2. 学生による授業評価を講義内容・方法にフィードバックする。
3. マルチメディアを活用して授業内容の多角化をはかる。
4. 遠隔教育のための環境整備を行う。

#### (現状の説明)

授業形態やクラスの規模は、カリキュラム設計に基づき、教室の収容可能人数のみならず、教育効果を考慮して決定している。

演習や実験においては、1クラスあたりの受講者数の上限は、機器の数のみならず、安全性、教育効果を考慮してあらかじめ科目毎に決定しており、これを超える受講者がある場合は、クラスを増やして対処している。

授業形態に関しては、教育効果の観点から種々の特徴ある取り組みを行っている。4年次の卒業研究の科目では、各研究室に5～10名が配属され、教員による個人的指導が行われる。一部の学生は、成果を学会や論文に発表する。体験を重視する授業形態は、卒業研究以外にも多く取り入れている。総合教育科目では特に理系の英語教育に力を入れており、日本人教員2名とネイティブ教員6名の体制で、リーディング、ライティング、コミュニケーションを統合的に教育している。さらに夏季合宿形式の科学技術英語実習も開講している。専門科目では、実験・演習科目を1年次から導入している。この他、物理学科では講義中に実験を実演して見せる講義実験を伝統的に行っている。また、生命科学科では合宿形式の臨海実習を夏季休暇中に開講している。社会とのつながりや学生のキャリアデザインも重視しており、企業から複数の講師を招いて「ベンチャーと起業」関係の講義を開講している。

授業についての細かな運営上の裁量は各教員に委ねられているが、授業形態、授業方式の適切性、妥当性については、各学科（教室会議や学科の教務委員会等）で定期的に検討するとともに、各学科の代表者により構成される「理工学部カリキュラム・ワーキンググループ」で横断的な検討を行っている。

マルチメディアを活用した教育を行うための設備は、ほとんどの教室に整備されており、充実している。その設備を生かして、多くの授業でマルチメディアを利用した講義が行なわれている。また、インターネットを通じて講義資料や演習問題の配信を行っている科目